

学修ポートフォリオの導入と今後の課題

Introduction of a Learning Portfolio and its Future Issues

大澤 聡子 川合 真由美
OSAWA Satoko KAWAI Mayumi

Abstract

This paper describes the development of a learning portfolio project introduced in 2023 and discusses its future issues. Compared to learning e-portfolios used by many universities, our learning portfolio is unique in that it is not Web-managed but it uses Excel as the platform. The effectiveness of our originally developed portfolio data collection system will be verified through a comparison with that of e-portfolios used at other universities. A student questionnaire conducted on the trial version will also be analyzed. Furthermore, it is argued that in the future, it will be necessary to include a digital collection of each student's work, evaluate each subject, and improve the quality of interviews by advisory teachers.

Keywords: 学修ポートフォリオ、eポートフォリオ、エクセル、アドバイザー教員

1. はじめに

情報化、グローバル化、少子高齢化などに伴い、産業構造や価値観の変化、格差の拡大など急激な社会的変化を経験し、また一方で自然災害、気候変動などが発生する中、予測困難なこれからの時代に対応できる人材育成が強く意識されるようになってから、既に久しい。中央教育審議会は平成 24 年の答申で「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」と題し、急激な社会変化に対応するため、基礎力を備えつつ、生涯学び続け、主体的に考える力を育成することを大学教育に求めている。大学教育の質的転換には、能動的学修の推進、十分な学修時間の確保、教育課程の体系化が示されている中で、学修ポートフォリオの活用にも言及されている。本学では、この中央教育審議会答申に 10 年ほど遅れ、令和 4 年度に学修ポートフォリオの開発が始まり、試用期間を経て令和 5 年度に導入された。

本稿では、学修ポートフォリオの役割と他大学での導入状況を紹介し、本学独自の学修ポートフォリオについて解説する。さらに、令和 4 年度に実施した試行版学修ポートフォリオに対する学生アンケートと他大学との比較をもとに、今後の課題を考察する。

2. 学修ポートフォリオとは

2.1 学修ポートフォリオの役割

中央教育審議会の「用語集」によると学修ポートフォリオとは、学生が学修過程ならびに学修成果を長期にわたり記録、蓄積したものを指す。学生は学修記録や蓄積した学修成果を、学修の到達度として自ら評価し、次に取り組むべき課題を見つけ、

新たな目標を立てて最終目標に向かってステップアップを図る。この仕組みにより、学生は自己省察の過程を体験することができ、到達目標に対して自律的で主体的な学修態度を身につけていくことが期待される。到達目標には科目の成績評価では測定できない個人能力の質的評価も含まれる。さらに、学修ポートフォリオの記録は教員・大学が組織として教育評にも利用される。（平成 24 年度 中央教育審議会「用語集」参照。）

こうした仕組みをもつ学修ポートフォリオには、重要な役割が 2 つあると考えられる。1 つは、自律的・主体的な学修態度を育成する手段としての役割である。学修ポートフォリオは学生が自らの学修を評価し、その到達状況を点検し、改善しながら目標到達を目指すツールである。卒業後、変化し続ける社会の中で生涯学び続けるためには、自ら目標設定し、自己省察を繰り返しながら目標に向かう姿勢が必要となり、大学教育の中で学生がそうした学修態度を身につけるために学修ポートフォリオが有効な手段として役割を担うと言える。2 つ目の役割は、きめ細かい学修支援のための情報源となることである。学修ポートフォリオは、教員・大学が組織としても共有し、その目的は上述のように大学全体の教育評価という側面もあるが、学生にとっては、きめ細かい学修支援が期待できるという点が大きい。従来の大学風景では、ひとつの教室で同じ科目を履修する学生たちは、実はそれぞれ異なる未来を描き、異なる目標をもちながらも同じ講義を受け、教員は個々の学生が描く未来に目を向けることはあまり多くはない。学修ポートフォリオでは、各自の目標が明示され、目標への学修到達度も記録されるためこれまで教員が把握しにくかった各学生の目標や学修状況の情報を容易に手にすることができる。学修ポートフォリオを情

学修ポートフォリオの導入と今後の課題

報源として活用することで、学生一人ひとりを理解し、きめ細かく支援する方法を考え学生の成長に教員が積極的に寄与することが可能となる。

したがって、予測困難な未来で活躍できる人材の育成にあたり、①自律的・主体的学修態度の育成、②きめ細かな学習支援の2点において、学修ポートフォリオは有効な手段のひとつと考えられ、積極的な活用には意義があると言える。

2.2 他大学での導入状況とその課題

大学情報システム研究委員会が平成29年に作成した「学修ポートフォリオシステムの導入・活用等の参考指針」（以下「参考指針」）には、アンケート調査に回答のあった国公私立12校からの導入状況がまとめられている。回答した大学の多くは平成20年頃から学修ポートフォリオを導入し、学修eポートフォリオ、すなわちデータをデジタル化しWeb上で管理するシステムとして導入している。以下では学修eポートフォリオについて、導入に係る費用と技術的サポート体制、基本機能、課題について紹介する。

なお、後述のとおり、本学の学修ポートフォリオはWeb管理システムを使用しておらず、他大学の学修ポートフォリオと区別するため、本稿ではWeb管理システムの有無に応じて、学修eポートフォリオ、学修ポートフォリオと呼ぶこととする。

2.2.1 学修eポートフォリオに係る費用と技術的サポート体制

本学との比較のため、アンケート回答大学12校の中から利用者数の少ない方から順に4校を対象とし、導入に係る費用と技術的側面について状況を紹介します。表1は学修eポートフォリオの導入形態と費用について示したものである。

表1 学修eポートフォリオの導入形態と費用

	利用人数	形態	導入費用	年間維持費
I	1,500人	パッケージ	1,000万円未満	1,000万円未満
II	1,600人	オープンソース	1,000万円未満	1,000万円未満
III	2,000人	パッケージ	2,500万円以上 5,000万円未満	導入費用に含まれる
IV	2,200人	独自開発	1,000万円以上 2,500万円未満	1,000万円未満

（「学修ポートフォリオシステムの導入・活用等の参考指針」大学情報システム研究委員会より）

学修eポートフォリオの形態には、業者が販売する「パッケージ利用」、無料のオープンソースを利用して学内で開発する「オープンソース利用」と完全に学内で開発する「独自開発」があるが、どの形態をとっても、導入にも年間維持にも同程度の費用が必要である。

さらに、学修eポートフォリオには技術的サポート体制が欠

かせない。表2が示すように、表1の大学はどの導入形態においても、学内か外部業者のサポートを備えている。

表2 学修eポートフォリオの技術的サポート体制

	形態	技術的サポート体制
I	パッケージ	・学内に技術的サポートできる教職員がいる。 ・外部業者にサポートを依頼している。
II	オープンソース	・外部業者にサポートを依頼している。
III	パッケージ	・外部業者にサポートを依頼している。
IV	独自開発	・学内に技術的サポートできる教職員がいる。 ・外部業者にサポートを依頼している。

（「学修ポートフォリオシステムの導入・活用等の参考指針」大学情報システム研究委員会より）

さらに回答大学12校全体を見ると、学内の教職員のみでサポートしている大学は6校、完全外部委託は4校、両方のサポート体制を整えている大学は2校であった。

2.2.2 学修eポートフォリオの基本機能

回答した12大学のほとんどが共通して備えている基本機能は以下の6点である。

- (1) 学修成果の蓄積
- (2) 学生の文書による振り返り
- (3) 学生による目標設定
- (4) 目標達成度の可視化・数値化等
- (5) 教員からのコメント機能
- (6) モバイル端末からの利用

学修eポートフォリオは、科目ごとに設定され、(1)～(4)は科目ごとの機能として備わり、科目担当教員が(5)のコメント機能を使い履修学生へのフィードバックを行う。(1)の学修成果とは、科目で作成したレポートや作品など成果物を指し、デジタル化して学修eポートフォリオに蓄積する。また、(2)の振り返り、(5)の教員からのコメントについては、その頻度の設定がシステム上で可能なため、学年ごと、学期ごと、随時、一週間ごと、中には授業ごとという回答もあり、様々である。

また、こうした複数の機能を学内の学修管理システム(LMS)と連動させ、システム上1本化している大学もあることが報告されている。

2.2.3 学修eポートフォリオの課題

費用の問題を除き、「参考指針」は学修eポートフォリオの課題を管理上の課題と教学上の課題としてまとめている。

管理上の課題は、表2で示したように技術的サポートが必須となり、多くの大学では外部委託だけではなく学内の教職員が

学修ポートフォリオの導入と今後の課題

その任に当たっていることが多い。上述のように12大学の内、外部委託のみの大学は4校であった。つまり、全体の3分の2の大学が教職員の業務として技術的サポートを行っていることになる。技術的サポートには専門知識を要するため、担当となる教職員はなかなか代替が利かず、その結果、個人への負担が大きいことが問題となる。

教学上の課題は以下の複数が挙げられている。

【学生の問題点】

- ・ポートフォリオの意義・目的およびメリットが理解されていない。
- ・効果的な学修方法を身につけようとならない。
- ・学修状況の書き込みを継続しない。

【教職員の問題点】

- ・学生にポートフォリオのメリットを理解させられない。
- ・教育プログラムの強化に反映する方法が分からない。
- ・学生の評価にポートフォリオをどのように活用すべきか分からない。
- ・学生の記録や自己評価にフィードバックをしない、コメントの仕方が分からない。

「参考指針」は全般的に、学修eポートフォリオの目的や意義が十分学生にも教職員にも理解が得られていないため、期待した以上の教育改善効果がみられていないと報告している。

3. 岐阜市立女子短期大学における学修ポートフォリオ

3.1 独自開発の方針

本学では、令和4年度に畑中重光学長のリーダーシップのもと、教務委員会へ学修ポートフォリオの作成依頼があり、開発がスタートした。Web管理システムを利用するには2節で紹介したとおり相当の導入費と年間維持費が必要だが、本学の事情として、その予算はない。また、本学にはLMSも導入されていないため、学修ポートフォリオを別のWeb管理システムに統合する手立てもなかった。したがって、多くの大学が採用する学修eポートフォリオとは別の手段を講じ、同等の効果を上げる仕組みを作ることがタスクとして課された。

そこで、独自開発にあたり、以下を基本方針とした。

- ・共通フォームをエクセルとする
- ・設定項目を縮小する

この2点は、Web管理システムを利用できない事実から帰結する物理的対処である。特に2つ目の「設定項目の縮小」については、学修eポートフォリオが基本機能としている(1)～(6)

の内、まず(1)と(6)を諦めざるを得ない。(1)の「学修成果の蓄積」については、中央教育審議会の「用語集」の定義に従えば、「学修ポートフォリオ」として蓄積が望まれるものであり、Web管理システム下であれば、学修成果をデジタル化して蓄積することが可能である。一方、エクセルを基本フォームとする場合、学修成果の蓄積には別のシステム(例えばTeamsの利用等)を開発・用意する必要がある、全体の管理が複雑化し安定的な運用に懸念がある。また、この問題と連動して、本学の学修ポートフォリオでは、科目ごとのポートフォリオの設定も行わないこととした。仮に、エクセルに履修科目ごとのシートを設定した場合、シート数が多数になることから、学生が個々で管理する際にはやはり、管理上の懸念が予測されるためである。(これらの問題については4節で後述する。)

以上の背景から、本学独自の学修ポートフォリオはエクセルを共通フォームとし、以下(i)～(iv)の基本項目を用意することとした。教員のコメント機能の代替として、アドバイザー教員制を作り、学修ポートフォリオを活用した面談を2年間で4回実施することとした。

- (i) 学生による目標設定
- (ii) 学生による学修目標達成度の評価(科目ごとではない)
- (iii) 目標達成度の可視化
- (iv) 成績の記録
- (v) アドバイザー教員制

これらの機能は最小限ではあるが、2.1で論じた学修ポートフォリオが担う役割、①自律的・主体的学修態度の育成 ②きめ細かな学修支援の2点を満たすよう意図されている。

3.2 岐女短 学修ポートフォリオ 一成長の記録ー

3.2.1 学修ポートフォリオの構成

上述の理由で絞り込んだ4つの基本項目をエクセルに落とし込み作成した本学独自のポートフォリオは、シート9枚で構成されている。また、この9枚のシートに記録することで、2年間の学修における成長が記録されることが明確に学生に伝わるよう、副題を「成長の記録」とした。

シートの構成は以下のとおりである。

- シート1：卒業までの目標と計画を記入
- シート2、3：成績記入シート
- シート4、5：自己採点シート(1)(2)
- シート6、7：自己採点シート(1)(2)
- シート8、9：自己採点シート(1)(2)

学修ポートフォリオの導入と今後の課題

2年間の内4回、下記の時期に該当するシートを記入する。(図1参照)

第1回：1年前期 卒業までの目標と計画（シート1）

第2回：1年後期 1年前期の成績と自己採点シート
（シート2, 3, 4, 5,）

第3回：2年前期 1年後期の成績と自己採点シート
（シート2, 3, 6, 7）

第4回：2年後期 2年前期の成績と自己採点シート
（シート2, 3, 8, 9）

図1 シートの構成と記入時期



各記入時期は、第1回目を除き、成績表が配布された直後に設けられ、学生は前学期の成績を確認しながら記録するとともに、前学期を振り返る自己採点シートに記入する。学修ポートフォリオへの記入は、しがたって、前学期に立てた目標を振り返り、学修や生活面の自己評価をし、新たな目標を立て、最終目標へ向けて実行する PDCA サイクルを回す仕組みとなっている。

3.2.2 各シートの内容とその意図

シート1：卒業までの目標と計画

2年間の大まかな目標と計画を4期に分けて計画する。目標には学修面だけでなく、サークル活動、留学、アルバイト、ボランティアなども含む。目標と計画を明かし、学生に2年間を目標をもって有意義に過ごす姿勢を持ってもらうことを意図している。また、アドバイザー教員はこの情報を面談で共有することで、入学後の早い段階で学生情報を把握することができる。

シート2, 3：成績記入シート

学生は、成績表が配布された後、学修ポートフォリオの成績記入シート2枚へ自分の成績を記入する。自ら記入することで、各科目を振り返り学修の自己点検の機会とする狙いがある。また、記入した成績はアドバイザー教員が学生の学修状況を把握するための資料となる。本学では、学生の成績は学科長と教務委員に共有されるのみで、全教員に成績情報は共有されない仕組みになっている。そのため、これまでは教員が学生の正確な成績を把握することが困難であったが、面談時においてアドバイザー教員は学生一人ひとりに対して学修到達度を成績シートによって確認しながら、指導することが可能になる。

シート4～9：自己採点シート（1）（2）

この2枚のシートは前学期の学修と生活を振り返り、自己評価をし、新しい計画を記入するためのものである。

自己採点シート（1）には「各学科の教育目標」3項目と12項目の「社会人基礎力」の全15項目を1～5点で自己評価し、自己採点はレーダーチャートとして可視化される。加えて、地域活動・部活動・アルバイト等の課外活動記録と検定試験・資格試験の記録も書き込む。このシートは特に学科の教育目標の達成度と社会人基礎力を履修科目の学修や活動をとおしてどの程度達成したかを自己評価し、学期の学修成果を振り返ることを目的とする。

3.1で述べたように、Web管理システムの無い本学では、科目ごとの学修ポートフォリオは管理上、得策と言えない。代替として、上述の15項目で学修成果を自己採点することとした。各学科の教育目標は主に履修科目の成績で自己評価が可能である。図2は学科の目標例であるが、学科目標はディプロマポリシーに基づいて作られている。

図2 自己採点シート（1）学科の目標（英語英文学科例）

学科の目標	①	基礎知識	英語圏の言語と文化についての基礎知識がある
	②	英語運用能力	TOEIC・英検の目標値に到達できている
	③	国際感覚	異文化・他者の立場を考えて行動できる

「社会人基礎力」とは経産省が示している「人生100年時代に求められるスキル」として提示するスキルであるが、履修科目や課外活動など、大学での学修や活動の中でも必要とされ、磨かれていくスキルである。社会人スキルは成績評価だけでは測定できないスキルであり、このようなスキルを自己評価することは、将来必要とされるスキルが、短大生活の中でも磨かれ、育成されることを意識させることが期待できる。しかしながら、短大の学修や活動と社会人基礎力を即座に、直接結びつけることは難しいと考えられるため、自己採点シートではそれぞれのスキルの説明に、大学生生活のどのような学修や活動が含まれるかを補足説明とし一例を示し、自己評価の指標とした。図3は社会人基礎力の一部であるが、それぞれの基礎力にどんな学科の学修が該当するかが括弧内に補足説明されている。

図3 自己採点シート（1）「社会人基礎力」（英語英文学科例）

考え抜く力	④	課題発見力	現状を分析し課題を明らかにできる（英語圏の言語や文化についてもっと知りたいことがある。英語運用能力に向けて学修すべき課題の発見など）
	⑤	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし、準備ができる（試験・レポート・検定試験等の準備）
	⑥	想像力	新しい価値を生み出すことができる（レポート・卒業研究など）

学修ポートフォリオの導入と今後の課題

自己採点シート（2）には、学修習慣・学生生活・進路についての3段階評価による自己評価と、振り返り・相談・新たな目標を書き込む記述欄を含む。このシートでは、学修成果や到達度とは別に、学修習慣・学生生活・進路を振り返ることを目的とする。また自己採点シート（1）（2）の点数評価に加えて、記述により具体的に学修成果、反省、問題点を明らかにし、次期の目標を立てるための欄が用意されている。

したがって、自己採点シート（1）（2）は全体として、学修成果、学修習慣・生活・進路を振り返り、新たな目標を立てることを目的としているし、学生の自律的・主体的学修態度の育成を期待している。また、成績シート（シート2，3）と同様、自己採点シート（1）（2）（シート4～9）はアドバイザー教員との面談の資料とするため、教員は各学生の学修状況・生活面・進路について詳細な情報として、学生指導に活用することができ、きめ細やかな学修支援が意図されている。

3.3 試行期間を終えて：アンケート結果

令和5年度からの導入に先駆け、令和4年11月から12月に1年生を対象に学修ポートフォリオ試行版を実施し、アドバイザー教員との面談後、「ポートフォリオと学生面談についてのアンケート」を令和5年1月に実施した。試行版学修ポートフォリオの実施内容は、実施時期が1年生後期であったことから、予定の第1回目（卒業までの目標と計画）と第2回目（1年前期の成績と自己採点シート）を同時に行うこととなった。

アンケート調査の回答者数は172名、回答率90%以上あり、表3-1～10で示すように10項目全てにおいて肯定的な回答が90%以上あった。

表3-1～5及び7から、学修ポートフォリオの目的が理解され、目標の設定、自己評価、次の目標を立てるPDCAサイクルが機能可能であると判断できる。ただし、今回の実施は第1回と第2回目を同時に実施しているため、第1回の目標と第2回の目標が同一である場合は多く、目標の修正が上手く機能していたかどうかは判断できていないことは付記しておきたい。エクセルを使った成績入力については表3-6のように問題なく、入力できることが分かった。また、アドバイザー教員との面談についての調査は、表3-8, 9のとおり、面談で十分活用されている状況が把握でき、また、学生の反応として、年2回のアドバイザー教員との面談を歓迎している様子が明らかになった。

表3-1 「卒業までの目標と計画」は立てられましたか。

	回答数	比率
できた	74	43%
まあまあできた	81	47%
あまりできなかった	12	7%
できなかった	5	3%

表3-2 「学科の目標」は理解できましたか。

	回答数	比率
できた	94	55%
まあまあできた	67	39%
あまりできなかった	9	5%
できなかった	0	0%

表3-3 「社会人基礎力」は理解できましたか

	回答数	比率
できた	74	43%
まあまあできた	83	48%
あまりできなかった	12	7%
できなかった	3	2%

表3-4 それぞれの項目について自己採点はできましたか

	回答数	比率
できた	95	55%
まあまあできた	65	38%
あまりできなかった	10	6%
できなかった	2	1%

表3-5 学期を振り返り、次の目標は立てられましたか

	回答数	比率
できた	91	53%
まあまあできた	67	39%
あまりできなかった	11	6%
できなかった	3	2%

表3-6 成績の入力方法は分かりやすかったですか

	回答数	比率
分かりやすかった	96	56%
まあまあ分かりやすかった	61	36%
あまり分かりやすくなかった	11	6%
分かり難い	4	2%

表3-7 ポートフォリオはご自身の目標設定に役立ちましたか

	回答数	比率
役立った	85	49%
まあまあ役立った	71	42%
あまり役立たなかった	14	8%
役立たなかった	2	2%

表3-8 アドバイザー教員は面談にポートフォリオを活用していましたか

	回答数	比率
活用していた	119	70%
まあまあ活用していた	37	22%
あまり活用していなかった	5	3%
全く活用していなかった	9	5%

表3-9 アドバイザー教員との年2回の面談は有意義だと思いますか

	回答数	比率
思う	90	53%
まあまあ思う	58	34%
あまり思わない	15	9%
思わない	7	4%

このアンケート調査結果から、開発した学修ポートフォリオに大きな問題はないことが立証され、令和5年度からの導入に至った。

4. 今後の課題

4.1 学修eポートフォリオとの比較

Web管理システムを有しない本学において、学修ポートフォリオ開発の大きな課題は、多くの大学が採用する学修eポートフォリオとは別の手段を講じ、同等の効果を上げる仕組みを作ることであった。本学が使用するエクセルを共通フォームとする、いわば紙ベースの学修ポートフォリオと学修eポートフォリオを比較し、今後の課題を探り、記しておきたい。

学修eポートフォリオの6つの基本機能(1)~(6)と本学学修ポートフォリオの機能(i)~(v)を以下に再掲する。

学修eポートフォリオの基本機能

- (1) 学修成果の蓄積
- (2) 学生の文書による振り返り
- (3) 学生による目標設定
- (4) 目標達成度の可視化・数値化等

- (5) 教員からのコメント機能
- (6) モバイル端末からの利用

本学学修ポートフォリオの機能

- (i) 学生による目標設定
- (ii) 学生による学修目標達成度の評価(科目ごとではない)
- (iii) 目標達成度の可視化
- (iv) 成績の記録
- (v) アドバイザー教員制

3.1で述べたとおり、両者には相違点が3つある。まず、大きな相違として、学修eポートフォリオの基本機能の内、「学修成果の蓄積」を装備できなかった点が挙げられる。ポートフォリオとは本来、成果物を蓄積し記録する役割を持つものあり、学修ポートフォリオにも学修成果物を記録する機能が必要であったが、エクセルをフォームとして構築した本学の学修ポートフォリオでは困難であったため、この機能はない。

次に、学修目標達成度の評価について学修eポートフォリオの場合、科目ごとに設定されているのに対し、本学の場合は、科目ごとの設定が無く、提示された「学科の目標」と「社会人基礎力」を当該学期の履修科目に照らし合わせて自己評価するシステムとなっている。

3点目として教員の関与については、学修eポートフォリオには教員からのコメント機能が授業ごとに装備されているが、本学のポートフォリオではWeb上でのコメントはできない。その代替として、アドバイザー教員制を導入し、面談で学修ポートフォリオを活用することとした。

4.2 課題

上述の3点から、今後の課題を記しておきたい。1点目、本学の学修ポートフォリオに学修成果を蓄積するシステムが無いことについては、今後、何等かの形で学修成果物を記録するシステムを構築する必要があるだろう。学修成果物の管理や記録は、個人でも可能と考えれば、デジタル化して保存する方法を学生個人レベルで実施することもひとつの方法と考えられる。大学側としては、個人が学修成果を蓄積し記録に残すことを習慣化できるよう、効率の良い、確実な方法を考案し、提示、指導することが今後の課題となる。

次に、学修の目標達成度が科目ごとに自己評価できない点については、Web管理を持たない本学の状況では難しい。この点を克服するには、学生とアドバイザー教員との

学修ポートフォリオの導入と今後の課題

面談を活用することが有効と考えられる。科目ごとの学修状況は成績に直接反映するため、面談時において教員は、成績を確認しながら、当該学期の履修科目の目標達成状況を確認し、学生一人ひとりを指導することが求められる。

この2点目の課題と連動するのが、アドバイザー教員の面談である。アンケート調査(表 3-9)から、面談は学生の評価が高かった。一方、2.2.3 で報告したとおり「参考指針」によると、学修eポートフォリオの教員コメント機能には、「コメントの仕方が分からない」「フィードバックをしない」など教員側の問題点があった。このことは、Web機能としての便利さが必ずしも活用されていないことを示唆し、逆に、直接、学生と関わる面談形式が学生指導に効果的である可能性を示している。ただし、試行版学修ポートフォリオについてのアンケート調査の自由記述から、以下のとおり面談に対して学生の印象は様々であった。

【肯定的意見 (一部)】

- ・先生と面談する機会が少ないので、先生とお話しできて楽しかったです。
- ・アドバイザーの先生とお話することができて、とても良かったです。
- ・自分に合ったアドバイスをもらえた。
- ・面談で進路について相談できてよかった。

【否定的意見 (一部)】

- ・全く就活とは関係の無い先生の世間話が多すぎた。もう少し就活関係の話をしてもらいたかったです。
- ・・・・行きたい進路と先生が望む進路が違うことを受け入れてほしい。
- ・面談の時間が短く、話が淡々としているので、内容をもう少し深く掘り下げて面談をしたいです。
- ・先生との面談の際、割と先生からの一方的な質問を答えるというような時間が長かったです。

否定的意見から、教員が学生の希望を十分に理解せず、面談を形式的に行っている様子がうかがえる。アドバイザー教員による面談は、直接学生の学修状況を把握し、一人ひとりをきめ細やかに指導する仕組みであり、また、本学の学修ポートフォリオの機能不足を克服する役割も担う重要なものである。学生アンケートの否定的意見を貴重な資料として受け止め、面談の質の向上に努めることが今後の課題と言える。

最後に、学修ポートフォリオ全般的な問題として、2.2.3 の「参考指針」で報告された問題点を振り返っておきたい。

学修ポートフォリオの意義や目的が学生にも教員にも十分理解されていないため、期待された以上の教育改善効果が見られていないことが問題として報告されている。また、学生側には学修状況の書き込みを継続しないという問題もある。これらの問題は、学修ポートフォリオを継続させていく過程で本学でも起こり得る問題と言える。どんなシステムにおいても、導入時にはその意義や目的が周知されるが、その後、意識しなければただの制度として形骸化する恐れがあり、既に、先行する他大学ではその問題が生じている。形骸化を防ぐひとつの手段は、学修ポートフォリオを定期的に振り返り、形骸化する前に改善策を講じることである。具体的には、学生と教員へアンケートによる評価を行い、項目の見直し、システムの再構築等の改善を実施し、長期的に意義のある運用を目指すことが期待される。

5. まとめ

令和5年に導入された学修ポートフォリオについて、独自開発の背景と本学の学修ポートフォリオの内容を解説した。令和4年度に実施した試行版学修ポートフォリオとアドバイザー制についてのアンケート調査結果から、大きな問題がないことが立証され、今年度、導入の1年目を迎えたが、今後の課題として、学修成果を蓄積するシステム構築、科目ごとの目標達成度評価について面談の活用、さらに面談の質向上を挙げた。また、このシステムが形骸化しないために、学修ポートフォリオの定期的な振り返りと改善の必要性を論じた。

参考文献

- 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」
中央教育審議答申, 2012.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/taoushin/1325047.htm
- 「学修ポートフォリオシステムの導入・活用等の参考指針」
大学情報システム研究委員会, 公益社団法人私立大学情報教育協会, 2017.
<https://www.juce.jp/info-system/port.pdf>
- 「用語集」中央教育審議答申, 2012.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/taoushin/1325047.htm

(提出日 令和 5年 9月 29日)